

# 考える力は表現によって深まり、 表現し合うことで思考が共有される

白梅学園大大学院子ども学研究科長 無藤 隆

表現力は、思考力、判断力とはどのような関係にあるのか。そして、こうした力を育むために、これからの子どもたちに求められる指導のあり方とは何か。白梅学園大大学院子ども学研究科長の無藤隆教授にポイントを解説してもらった。

## ● 表現力をどう考えるか

### 思考力、判断力、表現力は らせん的に高まる関係

表現力を育成するポイントを考えるに当たり、まず新課程で思考力、判断力、表現力が強調されている意図を改めて確認してみよう。これらの力は、新しくつくられた概念ではありません。従来から、基礎的・基本的な知識及び技能とあわせて指導すべき力と考えられていました。それが、新課程では思考力、判断力、表現力が3つのプロセスであり、らせん的に高まる関係にあると捉えられていることが重要です。

思考は、言葉をはじめとしたさまざまな表

現手段を用いながら深めていくものです。考えるとは、ある意味では対話することです。対話の相手は他人だけでなく、自分の場合もあります。誰かと対話するのなら適切に表現しなければ伝わりませんし、1人で考える時は考えを言葉にするなど整理することが思考を深める助けになります。また、表現が重視される別の理由として、表現したことは目に見えるため、具体的な指導や評価によって思考を深めやすいことが挙げられます。

このように考えると、思考力、判断力、表現力を切り分けても、あまり意味がないことが分かります。これらは、一連のプロセスとしてセットで高めるべき力と捉えていただきたいと思えます。

図1 言語力を3段階で考える

- 1 自然言語、日常言語
- 2 教科固有の言語
- 3 記号表現、パフォーマンス

#### 算数の場合

- 1 「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできたら、何羽になった？」
- 2 「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできた。それらを『足す』と『合計』で何羽？」
- 3 「 $3+2=5$ 」

#### 音楽の場合

- 1 「モーツァルトの曲がきれい、明るい」
- 2 「曲のテーマが……、リズムが……」といった音楽的な用語や、楽譜などで表現する
- 3 実際に所定のねらいを持って部分を演奏してみる

\*無藤先生への取材を基に編集部で作成

PISAなどの調査で読解力の重要性が指摘されていることから、新課程では言語力の育成も強調されています。言語力と、思考力、判断力、表現力は、密接にかかわっています。

## 自ら表現したくなる授業づくり



むとう・たかし◎お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授などを経て現職。専門は発達心理学、教育心理学。第6期中央教育審議会委員、同初等中等教育分科会教育課程部会長などを務める。著書に「現場と学問のふれあうところ―教育実践の現場から立ち上がる心理学―（新曜社）など。

言語力は、3段階に分けると考えやすくなります。①自然言語、日常言語、②教科固有の言語、そして③記号表現、パフォーマンスです（図1）。これらは幅がありますが、全て言語です。それぞれ具体的に説明しましょう。算数であれば、①は「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできたら、何羽になった？」といった表現です。これは日常的に用いられる言葉と同じです。②は「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできました。それらを『足す』と『合計』で何羽？」と、算数的な言語を用います。そして③は「 $3+2=5$ 」というように数式や記号などで表します。

豊かな表現とは、①③の表現を相互に翻訳して使いこなせることだと考えます。音楽を聴いて、「なんだかいいな」という表現しか出来なければ、①しか使えないこととなります。「このリズムやメロディーがいい」といった音楽的な言葉を用いたり、もっと専門的に楽譜で表せたりする方が、より具体的に伝わる表現と言えるでしょう。考えや思いを込めて、特定のパートを演奏できれば、それは思考し表現する営み自体です。

### ●表現力を高める指導①

#### 思いを表す言葉を適切なタイミングで与える

次に、表現力を高めるための指導についてお話しします。表現することは面倒なことともいえます。

本を読んでも、普通は「面白かった」といった感想で終わらせてしまいます。何が面白かったのかを分析的に表現させるためには、指導の工夫が必要です。従来の授業では、友だちの前で発表するような表現活動はありましたが、個々の思いをきめ細かく表す学習はあまり行われていなかったように思います。一方で、教育現場には、表現させたいと考えるあまり、「ただ話せばよい」という誤解があるように思えます。こうした誤解は、表現を目的化してしまう危険性があります。

例えば、音楽や体育の授業でも言葉で伝え合う場面が多く見られるようになりました。確かに大切な学習活動だと思えますが、音楽や体育の教科の目的は、演奏や運動の質を高めることにあります。そのためには、思い付いたことを話すだけの活動ではなく、先生が子どもの表現を分析して、「悲しい感じがしたんだね。それなら悲しさを出すように歌ってごらん」などと具体的な言葉を与える必要があります。これは国語や算数などの教科でも同じことです。

授業では、「表現したい」という思いを育てることも心掛けると思います。そのような思いを生み出すのは、主に体験活動です。例えば、物語を読んで思いを馳せたり、音楽を聴いて感じたり、理科の実験で気付いたりすることで、子どもの感覚や感性は磨かれます。それは、すぐに言葉で表す必

要はありません。例えば、音楽を鑑賞した後、多弁に感想を話すことだけが表現ではありません。しみじみと感動に浸ったり、思わず拍手をしたりすることも表現の一部です。型通りの表現をさせるより、口ごもっても「どう表現すれば伝わるか」と考えさせることが表現の出発点です。

そうした思いが見られたら、それを見直して再吟味するように促しましょう。作文に書くのであれば、「楽しかった」という表現から進み、誰に何を伝えるのかといったねらいや目的に照らして推敲させます。プレゼンテーションであれば、聞く人が分かりやすい内容や伝え方であるかをよく考えさせます。ここでは急かさないことが大切ですが、言葉に出来ずに終わるのもよくありません。教師は、思いや考えを表す言葉を適切なタイミングで与えるバランスを大切にしてください。

### ●表現力を高める指導②

## 体験と言葉の距離を意識し 発達段階に応じた指導を

系統的に表現力を高めるために、指導では低・中・高学年の段階を意識するとより効果的です(図2)。低学年は体験などから思いを育て表現につながることを大切にします。体験を言葉や文章にする指導などが中心です。中学年は単に語るだけではなく、語り方や絵、記号など表現の語を増やします。そし

図2 発達段階に合わせた指導を



\*無藤先生への取材を基に編集部で作成

て、高学年は表現を見直して再吟味させる時期といえます。例えば、「総合的な学習の時間」に市長に提出する提案書を模擬的に考える場合、明確な根拠を示すことや、内容が伝わりやすい表現を工夫します。

低学年では、幼児期の育ちも意識するとよいと思います。幼児期は体験を通した気付きをその場で表現することを大切にします。体験と言葉が近い状態です。低学年の生活科は、幼児期の体験活動に近いと言えますが、異なるのは体験による気付きを持ち帰り、整理して発表することです。体験と言葉の距離が少しずつ離れていくのです。高学年になると、体験がなくても共感する力や想像力で補って表現できるようになります。また、小説や詩、俳句・論説など、ジャンルによる特性を踏まえ、表現を考えられるようになります。一人ひとりの表現力を高める指導は、一斉指導の中でも工夫して取り入れることが出来

ます。ある子どもが算数の証明問題の発表をしたら、他の子どもに異なる説明をさせるとよいでしょう。また、跳び箱に成功した子どもに跳べた理由を動作と共に発表してもらい共有することも表現活動といえます。モデルとなる子どもが語ることによって、「そういう考え方があるのか」と、教室の中に思考や表現が広がっていきます。

学び合いも有効な表現活動となります。ペアやグループで、「自分はこういう理由でこう考えた」「なるほど。私は……」といった関係をつくっていきます。学び合いをより深めるためには、補助として子どもが共有する機会を与えることも大切です。代表的なのは板書です。日本の教師の板書技術は誇るべきもので、子どもの発言を写すのではなく、整理してまとめていく技術に優れています。そのような板書が媒介となり、子どもの考えをつなぎます。今後、先生方がより意識的に板書を活用することで、表現活動は促されるでしょう。子どもが共有する表現は、教師が与えるだけではありません。例えば、グループごとにホワイトボードを与え、子どもが考えを書きながら学び合うという方法も有効です。また、同時に、評価の仕方を見直す必要もあるでしょう。実践が広まりつつありますが、思考や表現を評価するには、習得した知識を使いこなせているかを見るパフォーマンス評価が適していると考えます。子どもの作品を

## 自ら表現したくなる授業づくり

並べ、「〇年生はこれくらいまで出来るという」といった具体的な評価規準を示せば、教師の目線も合ってくるでしょう。

### ●保護者との連携

#### 家庭でも中身のある語らいを促す働き掛けを

表現力は学校だけではなく、家庭でも育つものです。保護者には、子どもの話をよく聞き、分かりにくいことは言い換えてあげるように働き掛けるとよいと思います。「なるほど」「そうなんだ」といった相づちと共に話を受け入れる、共感的な関係が土台になります。そして、表現力を育むために、より詳しく説明させるなど、保護者との間でも中身のあるやりとりをしてもらいたいところです。

学校が家庭での語らいを促す課題を設定するのもよいでしょう。低学年では教科書の音読を保護者が聞いて記入表にチェックすることや、生活科で保護者の子ども時代をインタビューする活動などが考えられます。また、地域住民に話を聞くといった課題を取り入れると、普段はあまり接点がない異質な人とのかわりを持たせることも出来ます。

### ●管理職の先生への期待と今後の展望

#### グローバル社会の進展を見据えて根気よく自分を表現させる

表現力という観点から授業改善を進めるに

当たり、まず、考える力は表現によって深まる、また、互いに表現し合う活動によって皆の思考として共有されるという共通認識を、校内に広げることから始めるとよいと思います。

そして、「課題が解ければよい」のではなく、「どう解いたのか」「その解き方が適切なのか」といったことを自覚的に語らせる方向を大切にしながら授業づくりを進めてください。そのような過程を通して思考力も高まるのです。同時に、ホワイトボードやICT機器といった子どもの考えをつなぐための環境の整備も進めるとよいでしょう。全体で行っていた表現活動を、ペアやグループなどに分散させていくイメージを持ってください。

表現力は、これからの社会を生きていくために、更に重要になるでしょう。グローバル化が進むにつれて異質な相手と関係を築く必要性が高まるからです。そのためには、自分の思考について、相手の背景を踏まえて自覚的に話すなど、より高い表現力が求められます。いわゆるクリティカル・シンキング（批判的思考）の力も必要になるでしょう。

しかし、現代日本では少子化が進んで子ども同士の付き合いが減ると共に、同質の集まりが中心になりつつあります。それにより同じグループの中で相手の気持ちをくみ取るなどの力は高まります。絵文字の発達などがそれをよく表しています。半面、異質な相手に

自分の考えを伝えることは苦手です。

例えば、SNSや携帯電話などによるコミュニケーションは世界を広げるように見えますが、実のところ、自分に共感してくれる相手としか付き合えないという状況になりがちです。こうしてますます自分の考えを丁寧に説明する必要がなくなります。

このような社会状況だからこそ、学校教育では、異質な人とのかわり、根気強く自分を表現する場を増やすことがますます必要になるのです。

表現の工夫を要に据えることで、表現力と共に、思考力や判断力を高める授業がつけられていくことを期待しています。

## 特集取材を終えて

新課程で大切なポイントとなっている「思考力、判断力、表現力」。今回の特集では、特に目に見えやすい「表現」に着目することで、思考との関係や、より具体的な実践のヒントを得られるのではないかと考えました。取材を終えて、改めて、思考することと表現することは一体的な関係であること、そして「言いたい」「伝えたい」と「思わず表現したくなる」授業づくりをすることが大切なのだと感じました。

決められた「型」を与えるだけでなく、ただ子どもに任せただけでもなく、方向性を示しながら子どもの表現したい気持ちを育む授業のあり方とは——共に考え続けていきたいと思えます。

VIEW21 小学版編集長 杉田美穂